

課題研究 I キー・コンピテンシーと学力を問い直す

学力という用語については、日本の学校教育で長年の間使用され、その歴史的・社会的文脈の中で、一定の共通概念（及び概念装置）として理解が深められてきた。しかし近年、学力に代わって、キー・コンピテンシーという外来語が多用されてきている。コンピテンシーという用語がカタカナ語として使用される際に、はたして関係者の間でその含意が異同なく理解されているのだろうか。

本課題研究 I では、以下の 3 つの小テーマを設定して考えたい。(1) 「キー・コンピテンシーと学力の双方」についてそれぞれの中身を問い直す、(2) 「キー・コンピテンシーと学力との相互の関係」を問い直す、(3) 「キー・コンピテンシーと学力の測定可能部分（ないし測定困難部分）」を問い直す。

今回は、まず国語教育と算数・数学教育に関わる提案をもとに、キー・コンピテンシー概念と学力概念とを捉え直し、実践に寄与するための方途をめぐる討論の場としたい。

<コーディネーター・司会者>

梅原 利夫（和光大学）

大野 栄三（北海道大学）

<提案者>

阿部 昇（秋田大学）

小寺 隆幸（京都橘大学）

本所 恵（金沢大学）

課題研究Ⅳ 教育のグローバル化に教育方法学はどのように対応するか

経済のグローバル化、インターネットの世界的普及とともに、教育のグローバル化が進んでいる。多くの国において、スタンダードとアカウントビリティに基づき、リテラシー、数学、理科、外国語（特に英語）、ICT活用能力に焦点化したカリキュラム改革が行われている。日本においては、教育再生実行会議のもとで「戦後レジームからの脱却」をキーワードとした教育改革が進行している。その改革路線のもとで、高等教育においても、外国人教員の採用、英語による授業の拡大、といった人材・システムのグローバル化が進められようとしている。教育のグローバル化のこのような動きと其中における現代日本の教育改革をどのようにとらえたらよいのだろうか。教育方法学は、このことにどのように対応したらよいのだろうか。教育方法学研究の今後のあり方を展望する課題研究としたい。

<コーディネーター>

中野 和光（美作大学）

西岡加名恵（京都大学）

<司会者>

西岡加名恵（京都大学）

深澤 広明（広島大学）

<提案者>

松下 佳代（京都大学）

佐藤 学（学習院大学）

中野 和光（美作大学）

課題研究Ⅲ 教育方法学の学問的固有性とは何か―教育実践の研究方法論を問う―

これまで4年連続して、教育方法学の学問的固有性を多角的に検討してきた。本年度は、教育実践の研究方法論を問うというテーマを立てた。本課題研究では、教育方法学の質的研究方法の中で、歴史的アプローチ、解釈学的アプローチ、現象学的アプローチを取り上げる。教育方法学においては、教育実践の研究方法を知るだけでなく、研究方法を駆使して教育実践研究を実践することが重要である。

本課題研究では、独自のアプローチを取って教育実践研究を実践されてきている実績のある研究者に登壇していただき、自らの研究実践を踏まえて各アプローチの手法と特質・意義について語っていただく。その上で、各アプローチの相互交流をとおして、教育方法学における教育実践研究のあり方や課題について議論し、教育方法学の学問的固有性についての理解を深めていきたいと考えている。

<コーディネーター・司会者>

藤原 幸男（元琉球大学）

田上 哲（九州大学）

<提案者>

豊田ひさき（中部大学）

鶴田 清司（都留文科大学）

田端 健人（宮城教育大学）

課題研究Ⅳ 教育のグローバル化に教育方法学はどのように対応するか

経済のグローバル化、インターネットの世界的普及とともに、教育のグローバル化が進んでいる。多くの国において、スタンダードとアカウンタビリティに基づき、リテラシー、数学、理科、外国語（特に英語）、ICT活用能力に焦点化したカリキュラム改革が行われている。日本においては、教育再生実行会議のもとで「戦後レジームからの脱却」をキーワードとした教育改革が進行している。その改革路線のもとで、高等教育においても、外国人教員の採用、英語による授業の拡大、といった人材・システムのグローバル化が進められようとしている。教育のグローバル化のこのような動きと其中における現代日本の教育改革をどのようにとらえたらよいのだろうか。教育方法学は、このことにどのように対応したらよいのだろうか。教育方法学研究の今後のあり方を展望する課題研究としたい。

<コーディネーター>

中野 和光（美作大学）

西岡加名恵（京都大学）

<司会者>

西岡加名恵（京都大学）

深澤 広明（広島大学）

<提案者>

松下 佳代（京都大学）

佐藤 学（学習院大学）

中野 和光（美作大学）

課題研究Ⅴ 学校間接続を問い直す

近年、6・3・3・4制という第二次大戦後の学校教育制度に対する問題のひとつとして、保・幼・小・中・高・大における学校段階間の連携・接続のあり方が問われている。社会の多様なニーズに合わせた柔軟な制度改革とともに、目標、内容、方法の見直し、新たな体系性、連続性の追究が進められている。

すでに、公立の中・高接続に関しては、連携型・併設型のほか、一貫教育校としての「中等教育学校」も制度化されており、中教審や安倍内閣の教育再生実行会議においても、保・幼・小、小・中、中・高、高・大の接続・連携のあり方が問われている。

特に、「小1プロブレム」、「中1ギャップ」などといわれる教育の現状に対し、6・3・3・4制の見直し、子どもの発達に即した教育課程の柔軟な編成のあり方、教職員間の連携や意識のあり方、学校園と家庭や地域社会との関係のあり方など、多様な問題が検討されているが、その是非をめぐっては議論もある。

本課題研究では、特に、義務教育段階における公立小中連携・一貫教育に焦点化することで、論点を明確にし、議論を活発化させたい。

<コーディネーター・司会者>

池野 範男（広島大学）

田代 高章（岩手大学）

<提案者>

安彦 忠彦（神奈川大学）

二宮 肇美（呉中央学園、呉中央中学校）

樋口 直宏（筑波大学）

課題研究VI 教師教育における教育方法学研究の課題

—〈実践知〉の解明と育成へのアプローチ—

教師が、自らの実践の中で発揮し、同時に実践の中で自己形成し豊穰化させていく専門的力量としての〈実践知〉に、多くの実践的・研究的関心が寄せられてきている。それは、〈実践知〉が教師としての高度な専門性の中核に位置しているとの認識に基づいてのことであるが、同時に「暗黙知」としての性格を有するといわれる〈実践知〉をどのようなものとして描いていくべきなのかがいまだ未確定のままでの、関心の興隆でもある。

このような状況の下で、現実の教育政策主導の教師教育改革課題の一つに「実践的指導力」育成があげられたために、上記〈実践知〉への関心は、短期間でもたらされる成果の明示化とそれを生み出すためのシステムティックな手法の定式化という事態をも引き起こしかねないものとなっている。

今回の課題研究部会では、教師の専門的力量に対する幾つかのアプローチに学びながら、〈実践知〉の解明と育成の問題に焦点を当てつつ、教師教育における教育方法学研究の課題を明らかにしていく第一歩を踏み出していきたい。

<コーディネーター・司会者>

庄井 良信（北海道教育大学）

山崎 準二（学習院大学）

<提案者>

藤原 顕（福山市立大学）

小柳 和喜雄（奈良教育大学）

【会員企画課題研究】 課題研究Ⅶ

教科教育における思考力育成としての論理と感性の役割

昨年の課題研究では、思考力育成における感性の働きに着目し、授業における思考と感性との関係について議論する場を設定した。感性は芸術教科としての音楽科だけでなく、記号や法則を扱う理科といった教科においても働くものであることが確認された。

そこで次の課題として、国語や社会などほかの教科においても、思考力育成にかかわって感性は機能しているのだろうか、また機能しているとすれば、感性と論理はどのように関連して機能しているのか、という問いが浮かび上がってきた。

そこで今回は、教科教育において、感性の働きのみに着目するのではなく、論理と感性両方の関係に注目したうえで、思考力育成としての論理と感性の役割について明らかにしたいと考えた。両者の関係については昨年の課題研究で十分議論しきれなかった点でもある。あらゆる教科の立場が集う方法学会だからこそ、諸教科を横断して、教科教育における論理と感性の役割について議論する場としたい。

<コーディネーター・司会者>

片上 宗二 (安田女子大学)

清村百合子 (京都教育大学)

<提案者>

永田 忠道 (広島大学)

河野 順子 (熊本大学)

小島 律子 (大阪教育大学)